

(1～7 節、読む) 時代が変わりました。ヨセフの死後、300 年以上が経過しました。しかし、神様の約束と祝福は変わりませんでした。創世記 1：28 節「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。増えよ。地に満ちよ。』」時代は変わってもイスラエルは祝福の民でした。ヤコブ一族はエジプトで一つの国家を形成し得るほど、おびただしく増え広がって行きました。

——— ヨセフのことを知らない新しい王 ———

(8～14 節) さて、その頃、ヨセフのことを知らない新しい王が現れました。8 節「やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。」のです。その王はイスラエルの民を見て恐怖を覚えました。

昔 70 人のイスラエルの民が、今は壮年の男子だけで約 60 万人となっていたからでした。

(9 節、読む) そのエジプトの王様の恐怖とは・・・。

- ① イスラエルの民の数が多し。(9 節)
- ② イスラエルの民は強そうだ。(9 節)
- ③ イスラエルの民は皆、一致団結している (10 節)

そこで、王様は考えました。10 節「・・・彼らが多くなり、いざ戦いというときに敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くことがないように」

今、エジプトの王、ファラオは何とかして、彼らの力をそぎ落とそうとしました。そして迫害を始めました。

——— 迫害 その 1 ———

① 11 節「・・・彼らを重い労役で苦しめようと、彼らの上に役務の監督を任命した。・・・」役務の監督を通して、徹底的に抑え込もうとしたのです。ところがです。

12 節、「しかし、苦しめば苦しむほど、この民はますます増え広がった・・・」のでした。エジプトの王は、イスラエルの民が多くなることを恐れて、彼らに苦しみを与えたはずでした。しかし、宇宙を支配している神はその民を益々増えるようにされました。その結果、エジプトの「人々はイスラエルの子らに改めて恐怖を抱くようになった。」のです。

13、14 節、イスラエル人が増え広がったとは言っても、その現実は極めて厳しいものでした。「エジプト人は、イスラエルの子らに過酷な労働を課し、・・・」あらゆる労働で彼らを苦しめました。(14 節、読む)

しかし、それでもなおイスラエルの民はエジプトの王の命令に従いました。あえて、懸命に重労働に耐えました。それにしても、この強い意志はどこから来るのでしょうか。

(ローマ 13：1～3 節、読む) 今、イスラエルの民は、その国の支配者である王の命令に素直に従っています。繰り返しますが、神はその様な民を祝福されました。12 節「・・・苦しめば、苦しむほど、この (イスラエル) 民は益々増え広がって行くと書かれています。

さて、迫害をしても効果がないのを知った王は、更に次の手を考えました。

——— 迫害 その2 ———

② (15～22 節) 更にエジプトの王はヘブル人の助産婦たちに命じました。16 節「ヘブル人の男子が生まれたら殺さなければならない。」今、神に敵対しているサタンはファラオを通してイスラエルの民を苦しめています。しかし何と 17 節です。「しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにはしないで、男の子を生かしておいた。」のです。

——— シラフとプアの働き ———

聖書の中には、あまり目立ちませんが、神様のためにとっても大きな働きをしている女性があります。この箇所では、15 節の助産婦、シフラとプアでしょう。彼女たちは神様を恐れ、心から神様に従っていました。命を懸けてです。この当時王様に逆らったら命はありませんでした。しかし、もしもこの助産婦がエジプトの王の命令に従っていたらどうでしょう。きっとモーセはこの世に存在しなかったでしょう。王に逆らった者は、殺されなければならないのですが、神様は二人のために逃れの道を備えて下さいました。神様は二人に弁明すべきことばを備えて下さいました。王からこのことを追求された時、19 節です。「助産婦たちはファラオに答えた。『ヘブル人の女はエジプト人の女とは違います。彼女たちは元気で助産婦が行く前に生んでしまうのです。』」この言葉によって、ただ単に、赤ちゃんが殺されることから逃れることが出来たというだけではありませんでした。

今回の出来事を通して、20、21 節「神はこの助産婦たちに良くしてくださった。そのため、この民は増えて非常に強くなった。助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。」のです。一人の、そして二人の者が神様に従うことを通して、何と彼女たちの家も祝福されました。更にイスラエルの民全体も大きな祝福に満たされたのでした。

実に、彼女たちの信仰は

第 1 に、神を恐れる信仰でした。

第 2 に、神に従う信仰でした。

第 3 に、神を信頼する信仰でした。

第 4 に、神を喜ぶ信仰でした。

第 5 は、神を愛する信仰でした。

でも、これで終わったわけではありません。ファラオはまだまだ降参しませんでした。

——— 迫害 その3 ———

③ 22 節です。3 度目には、ファラオは更に恐ろしい計画を命令するのです。「ファラオは自分のすべての民に次の様に命じた。『生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかななければならない。』」

「生まれた男子は皆ナイル川に投げ込んで殺してしまえ。」

——— 迫害が起されたその理由 ———

それにしても、なぜこのようなひどい迫害が起こされたのでしょうか？ その理由を歴史的にさかのぼって考えてみましょう。

イスラエルの民は神に導かれてエジプトに下りました。そしてそこに住み着くようになりました。でもエジプトは本来彼らの住むべき地ではありませんでした。彼らは神様から選ばれた民でした。彼らが目指すのはカナンの地であったはずでした。飢饉が過ぎたら約束の地に帰らなければならなかったのです。しかしヨセフが死んでから後、エジプトはイスラエル人の安住の地になってしまいました。彼らはエジプトで成功し、土地も富も豊かに持つようになりました。今更、カナンの地に帰る必要もなくなりました。このようにして、彼らは神様からいただいた使命を忘れてしまいました。

——— 目を覚ました民 ———

それは神様から期待されている御旨の生き方ではありませんでした。しかし、誰も気づく者はいません。そこで神様は、イスラエルの人々が目を覚ますように「ヨセフのことを知らない新しい王」(8 節)を立てて、彼らを苦しめるようなことを始めたのです。今日はその3つの迫害を確認しました。この大変な苦しみの中で、やがて彼らは、自分たちが、神から示されていた使命を忘れていたことに気づかされることになるのです。

さて、私たちもいつの間にか平和の生活の中に流されてしまっていて、そこに安住し、選ばれた民としての使命を忘れかけているということはないでしょうか？ 私たち、常に神様に選ばれた民として、神様の御旨に従う民であり続けたいですね。

——— 大島先生の再献身のはなし ———

ハンセン病の共生園長嶋曙教会の、大島得尾(うるお)牧師の証です。先生は困難な働きが続く中で、先生自身の献身が挫折してしまいました。

——— ギデオンの祈り ———

そんな時に、先生は士師記のみ言葉を示されました。そこには「ミデヤン人と闘うように」と、神に召された時のギデオンの祈りが記されていました。ギデオンはこの召しが本当に御旨であるかどうかを次の様にして確かめました。

「もしあなたが、私の手でイスラエルを救おうとされるなら、・・羊の毛の上にだけ霜が降りていて、土全体が乾くようにして下さい。」翌朝、彼がその羊の毛を絞ると、鉢一杯になるほどの水が出たのでした。彼は続けて、もう一回祈ります。「今度は、この羊の毛だけが乾いて、土全体に、霜が降りる様にして下さい。」神様はその夜、その様にされました。

——— 再献身 ———

大島先生は、この聖書の箇所を原っぱの真ん中で思い出しました。ちょうど彼の回りにはシオカラトンボが飛んでいました。彼は祈りました。「私の献身が御旨ならばトンボがこの指に止まる様にして下さい。」その祈りを7回ほど繰り返した時、何とトンボは先生の指の上に止まったのでした。その場所から、先生は再び曙教会へと導かれて行ったのです

聖書のことば。「わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。」

出エジプト3:12 節。。

私たちも、神様の使命の中に生きお互いでありたいで3すね。